みなと・新橋 今・むかし新聞

第２号
平成26年3月

ばるーんの『語り部』ってなあに？

平成十三年「生涯学習ボランティア講座」事業として、生涯学習センター内桜田小学校記念室に、新橋界隈を中心とした区民の方々が集まり、「昔の港区」の学習会を行っています。

平成十五年度からは、これまでの学習成果の発表の場、また小学校の学習支援活動として、語り部のメンバーが小学校に出向き、子どもたちにいろいろな昔の話をしています。

地域の歴史や暮らしまた戦争の貴重な体験など、過去を風化させずに未来へ語り継ぐことが大切であると考えているからです。

この「みなと・新橋　今・むかし新聞」もその一環として発行しています。

ぜひ、興味のある方は、ばるーんまでご連絡ください。

「平和を考える集い」に参加して

平成二十五年八月二十四日に「平和を考える集い」が高輪区民センターのホールで開催され、戦争がもたらす惨禍を風化させることなく語り継ぎ、平和の大切さを改めて考えるという事で、語り部のメンバーに依頼があり登壇しました。

今回は井上さんと中嶋さんが戦争体験を語り、武さんがみんなで作った紙芝居を読んでくださいました。その時の内容や、その後の感想をまとめました。

戦争の体験や記憶を語り継ぐということ…。

「昭和二十年五月二十五日朝のこと」

井上　繁

昭和二十年五月二十四日の夜半から翌日にかけての空襲は、戦後公表された資料によりますと来襲したB29は五百六十二機、投下された焼夷弾の量は三千六百トンとあります。このB29の数、そして焼夷弾の量は、あの三月十日の東京大空襲を遥かに越えたものであったのです。

母と弟や妹は疎開し、私と父の二人が暮らしていた芝田村町の家は、それまでの何回もの空襲で周囲は殆ど焼き尽くされていたにも関わらず、幸いなことに焼かれる事なく残っておりました。

B29は焼け跡に焼夷弾を落とすような無駄な事は殆どしない事が経験から判っていたので、その夜も道路を隔てた焼け跡に立って空を仰ぎ、次から次へとやってくるB29の編隊を見上げておりました。

夜が明けると昨夜の空襲で、麹町から渋谷や新宿にかけてほぼ全滅との話が伝わってきました。四月に私が入学した中学校は永田町にあったので、恐らく焼かれてしまったであろう。でも授業の有無はともかく、一応学校に行ってみようと家を出ました。いつもは西久保巴町から大倉集古館脇を経て、斜めに溜池の先へと抜ける路を行くのですが、その日は虎ノ門や霞ヶ関あたりの様子を見ながら行く事にして、巴町の交差点を右に折れ虎ノ門へと向かいました。

虎ノ門の交差点を左折し、現在外堀通りと呼ばれている道路に出た時、目に入ってきたのは溜池方面から歩いて来る異様な姿の人々の集団でした。顔や手足は煤け、身にまとっている衣類は汚れたり破れたりしている。何人かまとまって来る人もいるが誰もが無言のまま。煙で目をやられたとみえて布で目の周りを鉢巻状に巻き、手を引かれて来る人も多い。その人の群れはどこまでも途切れる事なく続いておりました。

学校へは溜池を過ぎたところで右への脇道を行くので、そこでそれらの人とは別れました。学校は校舎の半分と体育館が焼かれて無残な姿となっていました。当時二年生から上は勤労動員で軍需工場へ行っていましたから、登校してくるのは同学年の一年生だけなのですが、ひとりとして姿を見せません。赤坂見附方面から登校して来る者が多かったので、そちらに行けば誰かに出会えるかも知れないと、その方へとくだる坂道へと回りました。その坂の上から目にした向かい側の青山方面は見渡す限り焼野原！

坂を下り終え大通りへと出る。地下鉄赤坂見附駅の入り口近くの路上のあちらこちらに、三十体前後の焼死体が転がっていた。広い道路の真ん中でありながら、なぜこんなにまで真黒に焼け焦げてしまったのか、不思議に思いながら一人の遺体を見ていると、弁慶橋の方へ逃げて助かったという人が、

「この道を逃げ切って、もう大丈夫という所で振り返って見たら、炎が道の両側から中央に向かって地面を横に這っているのだ。何だって凄い熱。地面近くの空気が上に上がって恐らく真空状態、そこへ炎が吹き込む」と話しているのを耳にして納得したのでした。

赤坂見附交差点近くの都電の線路上に、車体は焼け果てて鉄骨の部分と台車だけが残っていた車両が三両止まっていた。炎から逃れようと中へ逃げ込んだのでしょう。どの車両にも床の鉄骨の上に何人かの焼死体がありました。

半焼けの畳の下から、真っ黒に焼け焦げた下半身がはみ出していた遺体がありました。水を含んだ畳はさぞや重かったでしょうが、炎から身を守るために必死な思いで背負ったのでしょう。私を含め何人かが取り囲むようにして見ていたところ、その中の一人が、突然その畳を持ち上げ脇へとずらしました。上半身はナマのままの男性の遺体が目に飛び込んできました。

…学友とは会う事はないまま、家に帰る事にしました。

「今の平和に思うあの日のこと」

中嶋　弘

東京が未だ焼夷弾攻撃を受ける前、当時中学二年生の私は、神田へ本を買いに山手線に乗りました。有楽町まで来た時、突如空襲警報のサイレンが鳴り、電車が止まり乗客は一斉にガード下に避難しました。今考えれば電車や駅は格好の空爆目標でした。

しばらくして空気が割れるような音がして、爆発。あとは何も分からなくなりました。気が付くと、あたり一面、霞がかかったように埃が立ちこめ、とてもキナ臭い匂いがしていた記憶があります。周りにたくさんの人が倒れていて、お札が数枚散らかっていたのを覚えています。

負傷した私は、新橋の家までなんとか辿り着きました。すぐ近所の個人病院に母が連れて行ってくれました。爆弾の破片は私の身体の中に入ったまま。傷口を消毒し、縫い合わせて終わり。大きな病院に行っていれば、もう少しましな手当てをしてくれたのではないかとも思っているのですが。

幸い心臓や肺には影響がなかったようで、八十三歳の現在まで命永らえていますが、左の腕の下を手で触ると、ゴリゴリした遺物の感触があります。

たまに小学校へ社会科授業の一端として出前授業に行くと、話しのあとで子どもたちが「おじさん触らせて」と言ってきます。

中東戦争などで爆撃シーンをテレビで見ると、当時の記憶が甦り戦慄を覚えます。私の身体の中では、未だ戦争は終わっていません。

それから段々と戦争が激しくなり、日本各地に空襲も度々ありました。西新橋の私の家あたりは、昭和二十年三月九日から十日未明にかけてB29の爆撃大編隊の攻撃を受け焼夷弾が雨あられの如く降りそそぎ、あっと言う間にあたり一面火の海、全員近所の日比谷公園に逃げました。そこで一夜を明かし翌朝家に帰って見ると、あたり一面焼野原、コンクリートの建物以外は全て無くなっていました。

私の家の跡地に金庫が一つポツンと残っておりました。いつもコップに水を汲んで、金庫の中に入れて置いたのですが、開けて見るとコップの中の水が空っぽになっていました。

そのうち父が焼け跡から、材木の焼け残りやら、焼けたトタン板やらを集めて来て、掘立小屋を建てしばらくそこに住んでいました。

八月六日に広島、八月九日に長崎と原子爆弾を投下され八月十五日に終戦となりました。

八月十五日の天皇陛下のラジオ放送は、ガーガーザーザーと雑音がひどくて良く聞こえませんでしたし、意味も良く分かりませんでした。その中で「耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍び、以って萬世の為に太平を開かんと欲す」という言葉が電波の調子が良かったのか良く聞こえ、未だに覚えています。

戦後米軍の戦闘機がブンブン、操縦士の顔が良く見える程の超低空で飛び回っていたのですが、もう鉄砲の弾は飛んで来ないのだという安堵感で一杯でした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「平和を考える集い」後におもうこと

太平洋戦争(第二次世界大戦)が終わってから、もう六十二年が経過しようとしています。戦争体験者も多くが他界し、戦禍を伝える人も少なくなってきました。この度、朗読の会の肝煎りで平和の集いが開かれ、戦禍の様子を語る事ができました。学童の集団疎開を手製の紙芝居で演じたり、空襲の中を逃げ惑ったりした話やら、爆弾の破片が未だ背中に入ったままの人、短い時間でしたが一端を伝える事ができたでしょうか。今、青少年たちは、日本がアメリカを始め外国の軍隊と戦争し敗れ、長い間日本が彼らの占領下に置かれていた事、これらの事実を歴史の中の一事件として知るにとどまります。占領下の日本で作られた陶磁器の裏マーク「Mede in occupied Japan」(占領下日本製)を見る度に当時を思い出します。チャップリンの言葉に「一人を殺せば殺人だが百人殺せば英雄だ。」結局、戦争とは人と人との殺し合い。土地の分捕り合戦です。人類は、同じ事を何百年何千年と繰り返してきたのです。

さあ、武器を捨て外交手腕を発揮する時です。日本は外交が下手で弱腰だと言われていますが、自身を持って世界の人々と話し合い、平和に貢献いたしましょう。

「小さな思いで」

武　恒雄

父を東京に残し、母と三人の子供達で疎開暮らしを東北の街でしていた事がある。

物資不足、殊に食料の欠乏はとても深刻で母はその対応に苦労した事だろう。空き地を畑にして野菜を育てたりしていた。

そして町から一時間位歩いた所の農家を訪ねて米などの食料を分けてもらった。当時は配給制度があり、それ以外の売り買いは「ヤミ」という法律に違反する行為。夜の真っ暗な時間でしかやれないので、母も心細かったのか小学五年生だった僕がお伴をしたのを覚えている。

人が大勢殺されたり、街が破壊されたりの悲惨な面だけでなく、人の心を傷つける小さな辛い経験もたくさんあった。

二度と繰り返さぬよう戦争を起こしてはならないと改めて思う。

『東京大空襲』

東京大空襲（とうきょう だいくうしゅう）は、第二次世界大戦末期にアメリカ軍により行われた、東京に対する焼夷弾を用いた大規模爆撃の総称。東京は、一九四四年（昭和十九年）一一月十四日以降に百六回の空襲を受けたが、特に一九四五年（昭和二十年）三月十日、四月十三日、四月十五日、五月二四日未明、五月二五日～二六日の五回は大規模だった。その中でも「東京大空襲」と言った場合、死者数が十万人以上と著しく多い一九四五年三月十日の空襲を指すことが多い。都市部が標的となったため、民間人に大きな被害を与えた。

（出典　ウィキペディア）

■東京大空襲について展示されている施設

東京大空襲・戦災資料センター

〒一三六-〇〇七三　江東区北砂一丁目五ノ四

TEL：〇三-五八五七-五六三一

FAX：〇三-五六八三-三三一六

ホームページ：http://www.tokyo-sensai.net/

【開館要項】

開館日　水曜日～日曜日

開館時間　十二時～午後四時まで

休館日　月曜日・火曜日、年末年始（一二月二八日から一月四日）※三月九日・十日は曜日にかかわらず開館します。

協力費・一般　三百円

中・高校生　二百円

小学生以下　無料

フェスティばるーんで、あなたの戦争体験を聞かせてください。

港区立生涯学習センターで、『フェスティばるーん』が行われます。この中で「語り部」の部屋を行います。これまでの活動の様子などをビデオ上映や、『あなたの戦争体験聞かせてください。』というテーマで座談会を行います。語り部のメンバーとともに、風化しつつある戦争の記憶を一緒に語りあってみませんか？

日時：三月二十八日（金）十一時～十五時

会場：港区立生涯学習センター　三〇四学習室

発行・問合せ
住所　〒一〇五-〇〇〇四　東京都港区新橋二-十六-三
電話　〇三-三四三一-一六〇六
公益財団法人港区スポーツふれあい文化健康財団
港区立生涯学習センター（ばるーん）
協力・編集　新橋青年しんこう会